

## 第三分科会のまとめ

青 木 千代吉

### 1. 分科会の実際

この分科会は、標題のテーマで取り組んでこられた大屋幼稚園の発表を聞くことを中心として、それを発展させた話し合いができることを期待したが、そのようには展開しなかった。というのは、参会者はおよそ100名ぐらいであったかと思うが、それがすべて本学の学生で、話の内容は別項に掲げたように興味もあり、よく分ったのだが、いかんせん参会者すべてが学生ということで、単元設定を初め、幼児教育現場の問題——苦しみ、くふう、指導の展開、評価——について、発表に基づく質議・意見を出し合うという形にはなり得なかった。これは無理もないことだが、折角発表してもらった大屋幼稚園に対して悪かった、というのが実情であった。

いきおい助言者がこの実践研究の意味を語った、ということになったのだが、それとても参会者の学生諸君にはやはり他人ごとでしかなかったようである。学生諸君が質問し、発言できるというには、かなりの準備が必要なのだが、それはそれとして今後の一課題であるとして、もう一つ重要なことは、一般の参加者＝幼・保の先生がたの参加が、ある数だけはどうしても必要である。その幼保の先生がたと発表者、あるいは参加同志のダイアログがあれば、それを聞いているだけでも学生諸君は何かを感じ、自ら燃えてくる何かを抱くことができるであろう。そういう意味で、本研究集会には、幼・保の先生がたおよび父母の皆さんの参加要請、あるいは、それらの人々が参加せずにはいられないという質のものでありたいと思う。それは並たいていの計画では不可能であるが、少なくともそれは到達目標でなくてはならぬ。

## 2. 発表内容をめぐって

大屋幼稚園の実践課題と、その取り組みは平常の教育指導の中から生まれ、日常の教育実践を深化させるためのすぐれた実践報告である。

一般に幼・保などの年間指導計画は、改めて言うまでもなく、幼児の生活歴と指導領域を見渡した指導課目の二軸を以て構成し、その題目ごとに幼児の可能力の到達を配して構成されるものとされる。そしてそれは論理的には十分に系統を持ったものとして作成することができるわけだが、そのように組織づけられた計画の中の指導単元の一つ一つは、生活歴を軸とするかぎり、隣接の単元がどうしてもそれぞれ孤立的で、一つの学習単元から次の単元へという移りにおいて、学習体験における心的な脈絡が断ち切られたものとして存在しがちである。

大屋幼稚園では、この問題点の克服をめざして「大きな主題の創設」という呼び方で、児童の幾月もにわたる活動を基底づける、言わば「基底主題」として持続性を持ったものを設定し、その展開を場面づけた指導の評価について発表された。

その発表内容は前掲の大屋幼稚園の原稿に詳しいが、その内容を意味づけるための紹介をしてみよう。

上記の立場で大屋幼稚園が研究として取り組んだことは、まず「多領域にわたって活動の場を設定できる童話を選定する」ことであった。

この「童話選定」ということは、幼児の空想性という特質に適合したよい着想である。自分が作中の主人公となってその世界に没入し楽しむことを以て、彼等の諸体験を深化する契機とすることに役立つからである。

また童話は、その作品独自のプロットを以て展開する。それが多彩なものであればあるほど、幼児の、空想性・模倣性に合った体験への動きを誘発することになる。つまり彼らの現前する遊びは自らを作中人物に置き替えたものとしての興味に転換され、幼児らしい積極的な活動が展開することになる。

上記の立場で展開された流れについての発表があったわけで、それは、童話「ピノキオ」「おにの子あかたろう」に拠った基底主題によって、それぞれ「5月～11月」「6月～11月」という継続的な活動が方向づけられ、しかもその全過程は、幼児にと

ってより楽しい活動として評価できたことの発表であって、その意味は幼児教育における大切な着眼を示していた。

ただ、この「5月～11月」「6月～11月」という長い期間の中には、生活歴的に見て、たとえば「七夕祭り」「運動会」というようなそれぞれに独立性の強い学習单元があるわけだが、それと基底主題との関係を、いかに緊密に結ぶかということ、どう考えておくべきか、というような問題が無いわけではない。それらをふくめて、この発表のテーマをなお追求・発展させることが、幼児教育にとって大切な問題と思われるし、その追求はまた楽しい努力であると期待される。

(本学教授)